

— 第66編 — 奇跡の豊色都市

メキシコ中部に位置する標高2,000mの丘陵都市グアナファト^{*1}（先住民民族タラスカ族語で「カエルのいる場所」）。州都である現在はいくつもの大学が立地する人口15万人の学園都市でもある。銀が発見された16世紀中頃に開かれ、18世紀には世界の産出量の三分の一を占めた世界屈指の銀山都市として発展する。その豊かな富によって、スパニッシュ・コロニアル風のメキシコで最も美しいカラフルな街が生まれた。そして、植民からの自由を勝ち取るメキシコ独立戦争の発端となったのもこの街である。1810年頃のことであった。銀山も街もユネスコ世界遺産に登録されている。

谷合の街を遠望してみると、メキシコ独特な多彩な色使いに圧倒される。パレット上に無造作に散らばった絵具のような光景（写真66-1）はどうか。よく見ると、コロニアル風のページジュアーカー系が卓越する端正な植民地時代の建物群だけ

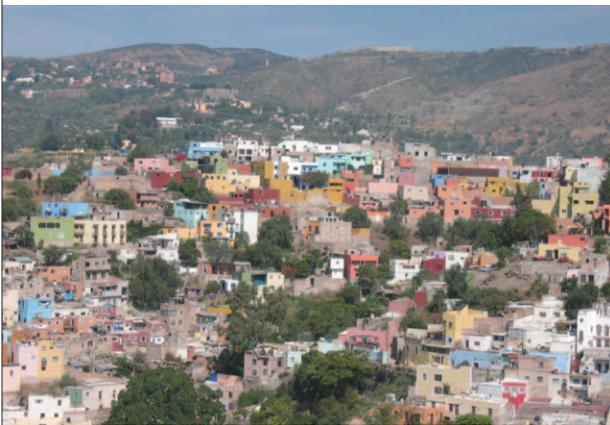


写真66-1 グアナファト全景

ではなく、斜面地上部に広がる住民自ら建てた数多の住宅群の色使いがこのまちの印象を創り上げていることに気づく。あの孤高の建築家にして色の魔術師ルイス・バラガンの作品群に残された赤や青や黄色の鮮やかな色彩が思い浮かぶ（第65編参照）。そこにはメキシコ独特の土着的な色の文化がそこに通底していることを理解することができる。それが近年日本で言う「騒色」などという概念が入り込む余地のない、日常的な生活環境の色彩に底抜けの闊達さを感じるのには私だけではないだろう。

この豊色都市は歩く人のための都市でもある。それが近代都市計画の帰結としてではなく、植民地時代に生まれた都心に展開する大小数々の広場を繋ぐ通りや路地の多くが、自動車交通から解放されている。その秘密は街の地下を縦横に走る自動車交通のためのトンネル網だ。街は当初、今は町の地下トンネルを流れるグアナファト川沿いに作られた。しかし20世紀中頃、繰り返される洪水への対策として建造物を持ち上げ、その数年後にはダムを建設し、川の流れを地下の洞窟の方向に変えた。そしてトンネルは車が通行できるように丸小石で舗装された。1960年代に自動車交通量を減らすために、鉦

道を掘る技術を駆使して銀で栄えた時代の排水溝などを利用し作られた。現在、街を走る車の過半がこの地下の道路網を利用して。その数計16本、総延長約27kmに及ぶ。一部は地下駐車場としても活用されているが、手掘りのようなトンネルから自動車群がコロニアルな地上に姿を見せる光景（写真66-2）は、時を超えた意外性に満ちている。



写真66-2 地下道路の出口

*1
Guanajuato: メキシコ・グアナファト州の州都。地域の人口約16万

*2
Spanish Colonial: 17世紀から18世紀にかけてスペインからの移民たちが世界各地の植民地で発達させた建築様式